演題番号：D3

猫の骨盤狭窄症による巨大結腸症に対して坐骨間恥骨移植術を行った6例

○米地謙介，米地若菜，西田周平，中津宜子

奈良動物二次診療クリニック

1. はじめに：猫の骨盤狭窄症（Pelvic canal stenosis）による巨大結腸症は骨盤の狭窄部を拡張することで症状改善が期待できる。骨盤狭窄症の原因の多くは骨盤骨折であり、変形のバリエーションが多いことから術式決定が非常に困難であることも多かった。今回、我々は自家骨を坐骨間に移植し、ロッキングプレートで固定する術式を開発し、骨盤狭窄症による巨大結腸症の臨床例 6 頭において実施した。治療成績と合併症について報告する。

2. 材料および方法：2017 年 4 月から 2023 年 9 月の間に骨盤狭窄症による巨大結腸症を主訴に奈良動物二次診療クリニックへ紹介来院した猫 11 頭のうち 6 頭に坐骨間恥骨移植術を実施した。坐骨間恥骨移植術を実施していない 5 頭のうち 3 頭に恥骨切除術、2 頭に寛骨臼切除術を実施した。手術においては、骨盤結合部に付着する内転筋や外閉鎖筋などを鈍性剥離して恥骨体と坐骨体を露出し、恥骨を左右恥骨枝の寛骨臼隣接部および坐骨結合前縁の三カ所で切断して坐骨間への移植骨とした。次いで、坐骨結合を骨鋸で離断し、その離断部を小型の開胸器で拡張した後、その間隙に先ほど切除した恥骨片を背側面に 90 度回転して移植した。最後に坐骨体と移植した恥骨片をロッキングプレートにて固定し、閉創した。

3. 結　果：ロッキングプレートを用いた坐骨間恥骨移植術を実施した 6 例の全例で臨床症状が改善した。このうち 4 例において移植骨と坐骨との骨癒合を確認した。残りの 2 例においては、坐骨に設置したスクリューの脱落によって固定が不完全となったが、骨盤腔の再狭窄は最小限で巨大結腸症の再発は認められなかった。全例でインプラント除去は行っていない。

4. 考察および結語：今回の結果から本術式の高い有効性が示された。これまでにも坐骨間を拡張させ何らかのスペーサーを設置する方法は考案されてきたが、その多くは人工物の移植であり、長期間の形態維持において不安があった。本術式では自家骨を移植するため移植骨が坐骨と骨癒合し、恒久的な安定性が期待できることが大きなメリットであると思われた。一方で術後に固定が破綻した症例は手術手技の未熟や術後安静ができなかったことなどが原因として考えられ、今後の改善が必要であった。